

一 仏 乘 の も と に

——法華經による諸神の包容——

高 橋 堯 昭

ガンダーラ美術の宝库、パキスタンの博物館では不思議な現象が見られる。それはマーシャル・オーレルスタイン或いはフーシェ等の発掘したガンダーラ出土収集品、即ち英国支配時代のものが、そのまま展示されていて、パキスタン自体になってからのものはまことに少ない。(最近の発見のものは例えばペシャワル大学等に収蔵されている。)一方最近出土の大部分のものは海外に流出している。前者はギリシャローマの文化の影響のものが多く、後者は土俗的な文化、又はペルシャ文化の影響の強いものが多い。即ち黒色片岩のギリシャローマ的なのはガンダーラの中北部、白っぽい岩、青味がかつたものは周辺の山地、或はスワットから。これらは土俗的なもの、ペルシャ的な影響のものが多く、従ってパキスタンの博物館にあるものは、前者に属し、後者のものはまことに少ない。

この点、筆者のコレクションの方がより新しい傾向のものが多くといえる。然し何分盗掘されたもの、或は正規の発掘のものでも横流しされたものだから出土地が特定されない。

筆者は敢て追求しようとして、しばしば生命の危険を感じたこともある。これらはシンジケートがすべてを握っているからである。従って、石の色・性質から或は又莫然と「ここらあたり」とにおわず出土地を信する外ない。



A トリトーン

こうした異った傾向のものを並べてみると、当時のガンダーラの社会、即ち異った民族・種族、そして多種の文化の共在が推定される。恰もカニシカ・フヴィジカ等のクシヤンのコインが異種多様な神々をミントしているように。

こうしたことから、当時のガンダーラは普遍的世界を作っていたことがわかる。従って、そこに成立した仏教、特に大乘仏教、その大乘仏教の華たる法華経は「一仏乗の中にすべての神々を包容する」という性格をもつのも自然なことと思われる。



こうした土俗的ペルシヤ的な匂いのこい実にユニークな彫刻を、筆者は最近又二つ手に入れた。一つはギリシヤ神話の神トリトーンの像であるが、これは非常に変っている。普通のは羽根や足をもった蛇の下半身の上に人間の上半身が乗っているのに、この像は遅しい鰐のような足を持ち、羽根をもった竜の上に、人間の上半身が乗っている。即ち



B 龍に腰掛けるパンチカとハーリティー



C パンチカとハーリティー ブリティッシュミュージアム蔵

上半身が竜と人間の二つあるという、今迄見たことのない特殊なものである。これがクシヤンの柱の特徴たるアーカンサスの柱頭をもった角柱の横にあるからクシヤン時代のものとわかる。然も石はみどりがかったスワット特有の石だからこの時代にこうした信仰・思想がこのスワット地方にあったことがわかる。

もう一つの作品は写真B三段の彫刻。石はみどりがかったスワットの石。一番上は二人の人物が踊っている。一人はズボンをはき、他はドーティーだが、帽子や上半身の服装からみて遊牧民の姿。二段目はたくましい足をもった竜を椅子代りに、口髭鬚をもった偉丈夫が腰掛けている。下段のものは、ふくよかな胸から見て婦人、やはり竜に腰掛けてい

る。特に婦人像は竜の首を左手でだき、右手には槍をかかえている。その槍の穂先はふくらんでいて「蕾」のよう、

武器としての槍ではない。然もこの女性の右側横から立ち上った木で体全体がおおわれている。ブドーの木である。

これは写真Cのアルドクショーやハリティー（鬼子母神）の持つコルヌコピア（木の芽の萌え出する動物の角）と同じ豊穰をあらわしているといえる。このふくよかな女性とのペヤーから上の男性はパンチカ、下はハリティーと比定される。毘沙門天の大將軍であるパンチカとハリティーとが竜と結びついている。勿も毘沙門天王は夜叉の軍と竜の軍の二隊を率いているから不思議ではないが。この竜も夜叉共々仏教の中にとり入れられて来たことが注目される。なぜなら、この彫刻は或るストウパーの仏伝図や仏像彫刻の仕切りの柱代りのものだったからである。

こうしていろいろの神々が仏教の中にとり入れられていった。特に夜叉は樹神信仰にルーツをもつ大地の生命力で早くより仏教にとり入れられていた。例えば仏伝で、釈尊の出家出城の時、蹄の音で城中の人の目が覚めないよう、馬の足を夜叉が捧げ持ったとか、菩提樹下の悟りの時、大地を震動させてマールを退散させたり、否々マヤ夫人が樹の枝をつかんで釈尊を産んだり、以来釈尊は樹の下で悟り、樹の下で暮し、サラ双樹の下で入滅して行った等々、古来からの樹神信仰の伝統の中で一生を過ごされたといえよう。

ハリティーはガンダーラの土俗神、これが西方のアルドクショーと結びつき生産の神となり、仏教にとり入れられて鬼子母神話を生んで行った。そのパンチカとハリティーがこのように更に又竜と結びついている。まさにクシヤンの普遍的世界を表現しているといえよう。

このさまを如実に示したのが律蔵の文である。即ち善見律毘婆娑第一に、

即遣大徳末闍提^一。汝至闍賓捷陀羅國中^二。……竜王^三……復作暴風疾雨雷電霹靂^四。山巖崩倒樹木摧折。猶如虚空崩敗^五。竜王眷屬童子。復集一切諸龍童子^六。身出烟竟。起大猛火^七。雨大礫石^八。欲令大徳末闍提恐怖^九。……

大徳末闡提。以神通力蔽龍王神力。……以甘露法味教化示之。令其歡喜。帝伏龍王受甘露法。

（大24—六八四下—六八五上）

とカシミールやガンダーラに派遣されたマディアンティカに対して竜王が看族を総動員して抵抗したが、遂にマディアンティカに降伏し、甘露の法味で教化されたとある。

これは又根本説一切有部毘奈耶雜事四十にも

迦濕彌羅國……

我涅槃後滿百歲後、有一苾芻名末田地那。令我教法流行此國。……毒龍其名忽弄。……龍即降靈放尊者上。變成天

華續紛亂墜。龍如忿怒更……

（大24—四一〇下）

と予言の形で竜が抵抗するが、ことごとくマディアンティカの神通力で破られ、遂に教化されると書かれている。

これと同じことが阿育王経にもあり、末田地による罽賈の竜の降伏と法蔵の広布が書かれている（大50—一五六の上中）。更に又「島王統史」がマツジャンティカ等が「ガンダーラの怒竜を」（八一—一三）とか「大王統史」でも「カシミール及びガンダーラで抵抗するアーヴァーラ竜王を受戒させ、八万四千の諸竜、多数のヒマラヤの乾闥婆・夜叉・鳩槃荼鬼・パンダカと名付く夜叉、ハーリター夜叉尼はその児五百と共に初果（預流果）に達したとある等々」、諸律と同じような表現があつて、仏教がひろがって行くうち、その土地、そこに住む住民の信じていた神々がとり入れられ、所謂「所を得さしめ」て行ったことがわかる。

竜が經典の中にとり入れられ、主要な役割を演じているものに、法華経の提婆品がある。これは竜女の成仏を紹介し人間の女性の成仏を説いている。然し、当時女性がこうした竜を介さずストレートに成仏する經典が十指に余り、

正法華經や海竜王經を訳した竺法護もそのうち四つも訳している程である。八才とか十二才の幼女が成仏を受記されている。勿も当時の女性の社会的地位や性の問題、即ち古代から女性の月々の出血や出産等、血を「汚れ」とみる習慣から、日本でも忌み家があり、現代でもチトラル附近の Karash Bombret Valley の山合いの谷ではこの習慣が残っている。従って、一旦は「変成男子」となり、生れ変わり死に変わりして修行することによって成仏するという經典である。こうした經典は仏説須摩提菩薩經の文の如く、「法には男も女もない」ということが基本となっている。このように女性がストレートに成仏するという經典が竺法護に四つも訳され、カシミールの僧、瞿曇僧伽提婆やカシミールに遊学した羅什も訳しているということは、彼等のいた西北インドに、この女人成仏の思想があったことがわかる。そこでは男と女は平等で、一步下っても、そうした理想を描けるような精神的社会的に自由な環境があったとも言えよう。

ちなみに、ストレートに人間の女性の成仏するという經典を列記すると、次の如くなる。否、もっとあることであらうが、現在の所筆者の探し得たものだけ列記してみた。

1 仏説須摩提菩薩經 月氏 竺法護 訳

郁迦有女名須摩提、厥年八才：法無男無女：便成男子頭髮即墮迦裝著身……。(大12―七六―七八)

2 仏説須摩提菩薩經 羅什 訳

長者優迦有女名須摩提、厥年八才奉敬過去無數百千諸仏：即成男子頭髮即墮袈裟在身便作沙彌、文殊師利言、

審我来当作仏：形体顔色如年三十(大12―七八―八〇)

3 須摩提經 菩提支流 訳

一仏乘のもとに(高橋)

一 仏乘のもとに (高橋)

王舍城有長者女、名爲妙慧、年始八才…變成男子如三十才知法比丘 (大12—183中)

4 仏説阿闍世王女阿術達菩薩經 竺法護 訳

当棄女身男子己、当生忉利天上 (大12—189上)

5 仏説離垢施女經 月氏 竺法護 訳

有女名維摩羅達、厥年十二端正…語離垢施女…三千世界六反震動變成男子…仏土清淨一仏土 (大12—196下)

6 得無垢女經 元魏波羅門瞿曇般若支流 訳

波斯匿王有女名得無垢、已会親近無量諸仏、久種善根供養多仏…年始十二 (大12—198下) …我婦女身即成大

夫、始年十六端正童子…軀女人身得成男子…於八十千阿僧祇劫。行善提行…求阿耨多羅三藐三菩提。…

(大12—106中)

7 慧上菩薩門大善權經卷上 竺法護 訳

貴姓有女名執祥…執祥女終軀女身、得生忉利紫紺天宮 (大12—158中) …緣斯貧欲壽終天女即爲男子…

(大12—158下)

8 仏説超日明三昧經 西晉 曇承遠 訳

於是具有長者女名慧施、…施是慧施、則軀女像 (身) 化成男子踊在宮中…諸女欣然即成男子…却後十劫皆當爲仏

(大15—154上)

9 增一阿含經卷三十八 東晉 闍賓三藏瞿曇僧伽提婆 訳

是汝善知識彼仏當授汝決 (大2—1758上) (女人の五障にも拘らず)

10 五分律二九 仏陀什共竺道生等訳

(女人の五障にも拘らず) 今当云何受具足戒(大22—一八六上)

こうした経典があるにも拘らず、妙法蓮華経の提婆品の後半の如く、「竜女の成仏を介して人間の女性の成仏」をとく経典も併せ出て来た。然もそれだけではなく、竜に偉大な力を認め、竜の住む海底深き宮殿に人々を貧苦から救う宝珠があるとし、これをとって来て人々を幸福にしようとする利他の精神が見える。然も途中「大乘をとらんと欲す」(四分律大22—九一二上)との言葉を四回もくり返す等、大乘的な思考が見えてくる。更に海竜王が宝珠を与えた後で、部下の「二竜を派遣して」(大22—九一二中)娑婆世界に衛護して送り返したとあって、竜は「守護的」な性格までつけて来ている。これは後述の菩薩像の胸にネックレス状につるした経筒或いは宝珠の両側を竜がくわえているものに連らなる立場であろう。仏教が竜を教化し、竜を守護神として所を得さめていったことは前述の諸律の表現を裏書きしているものといえよう。

とにかく竜女を介して人間の女性が成仏したり、竜宮を理想境とする経典を列記してみよう。

1 長阿含経十九 第三十世紀経 龍鳥品 後秦弘始年仏陀耶舎共竺念仏 訳

大海水底有娑竭龍王宮：至七生身命盡我清浄衆(大1—一二七中)

2 菩薩本行経卷下 失訳人名

大海竜王即髻中摩尼法珠以上菩薩：終寿皆生天：得脱竜身生於天上(大3—一二四上)

3 正法念処経 魏般若流支 訳

海水下五百由旬、有竜王宮 種々衆応以為莊嚴：(大17—四〇二中下)

一 仏乘のもとに(高橋)

一 仏乗のもとに（高橋）

4 四分律四十六破僧擗度第十五 仏陀耶舎 訳

欲往海竜王宮 乞如竜宝珠 令閻浮提衆生 無貧苦「欲取大乘」（四回くり返す）（大22―九二二上）

5 海竜王経 竺法護 訳（正法華経を訳す前年）

受決品 第十三

諸法無二……阿耨達龍王……以白珠璣價當世而覆仏上（大15―一四九中）

女宝錦受決品 第十四品

各以右手執璣珞……不可以女身得成仏道、男子之身亦不可得、道心無男無女……仏告諸比丘、此宝錦女三百不

可却復當得作仏号白普世如来至真等正覚（大15―一五〇下）

舎利品 第十七

仏滅度時在此大海留全舎利……一切衆生何縁得度、永為窮厄無救護（大15―一五二上）

法供養品 第十八

転女人身得為男子……則取珠璣珞……用散仏上（大15―一五三上）

6 薩曇分陀利経 失訳人名

（大体法華経の提婆品とほぼ同じ）

7 正法華経 西晋 月氏国三蔵竺法護 訳

七宝塔品 第十一

竜王女 年八才……於斯變成男子菩薩尋即成仏（大9―一〇六上）

8 妙法蓮華經 後秦龜茲国三蔵法師鳩摩羅什 訳

提婆品 第十二 (大9—三五下)

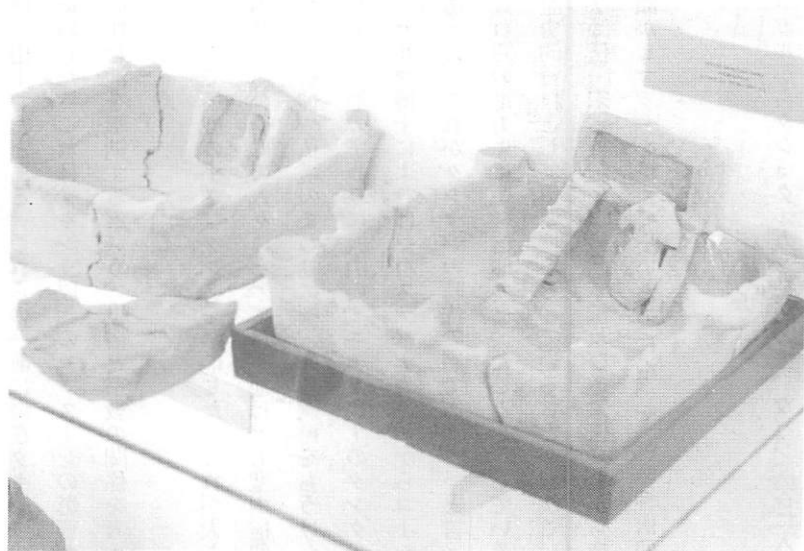
(内容 正法華經及薩曇分陀利經とほぼ同じ)



然らばどの範囲にこの竜神信仰がひろまっていたのだろうか、律蔵の前掲の文章以外、四世紀の法顯伝・六世紀の宋雲行記(洛陽伽藍記卷五に付載)・七世紀の玄奘の大唐西域記・慈恩寺法師伝等で推測するしかない。前掲の律蔵の成立が西歴紀元^⑤をさかのぼらないから、これよりずっと後の求経僧の記録では律蔵の文字を裏付けるには余りにも時間が立ち過ぎているが、ほかに文献として書かれた資料のない状況ではこれにたよざるを得ない。まず消極的な資料として敢てとりあげることとした。

然し幸いなことに、時代的にびったりな有力な資料が出て来た。それはマーシャルのタキシラ発掘記録である。マーシャルによると、タキシラのクシヤン時代のジヤイ

一 仏乗のもとに(高橋)



D 竜神に捧げられたミニチュアのクレイのタンク (Taxila 博物館)

ナ教の寺と思われる所から沢山の粘土のミニアチュアーの水槽が出土したとある。これらの一部は現在タキシラの博物館に展示されている。金持ち長者は竜神の住むタンク池を奉納した。これはタキシラ以西のモンスーンの影響が少なくなる乾燥地では灌漑の為池を作るといふ社会的貢献が竜の住む池を奉納するという、世俗と宗教の関係を考える上でも非常に重要な資料でもある。

然し金持ち池を供養出来ても一般大衆はそうは出来ない。そこで模型の小さなタンクを奉納した。これが大きなタンクのまわりから沢山出土したことは非常に興味がある。当時の竜神信仰の人々にとっては、池は恰も聖樹信仰の聖なる樹や仏塔信仰の仏塔の如く神の住む所と考えられた。だから樹神や仏塔のまわりに柵、即ち欄柵をもうけたように、池のまわりに柵を設け、チャイトヤとして祀った。そしてその池のまわりに沢山のミニチュアーのタンク・水槽を作って奉納したらしい。これはタキシラだけではなく、シャルマ博士によれば「ハステイナガルからコーシャンピーまで、こうしたミニチュアーのタンクを奉納した跡があった。これがクシヤンの時代の層であった」と言っている。このことは仏教がガンダーラ等に拡大して行った当時これらの地方には竜神信仰のあったことを示している。従って律蔵等の文字は荒唐無稽の作り話・絵空事ではなく、歴史的資料として重要性をもっていることがわかる。

さて次は少し時代は下るが、法顕伝・大唐西域記・慈恩寺法師伝・宋雲行記・魏書西域伝及び道栄伝などから竜神信仰の記録をひろってみよう。順序としては北から南へ、法顕がヒマラヤを越えて歩いた道に沿って「竜神信仰」の跡をさぐってみよう。

◇

まずタクラマカン砂漠を通過してパミール高原への入口カシユガルからタシユクルガンを通過して、ワハン溪谷に入り、

カランバル峠かバロギル峠でカラコラム山中に入り、更にダルコット峠を越えてギルギット川を伝って下り、スワット・ガンダーラに入る道に沿ってみることにする。

1 波知国 バロギル峠を越えたイシュカルワルズ附近(長沢氏法頭伝・宋雲行記東洋文庫一九五頁)
宋雲行記

毒竜がこの地に住みつき、しばしば天災地異を起している。(毒竜は)夏は豪雨を降らせ、冬は雪を積らせるので、旅人はこの為に苦労することが多かった。(前掲書一四八頁)

魏書卷一〇二、西域伝

波知国は鉢和の西南にあり、土は狭く人は貧しく山谷に依託す。……三池あり。伝えて云う。大池に竜王あり次の者には竜婦あり、小なる池には童子あり。行人之を經るには、祭を設けて乃ち過ぐるを得る。祭とざれば風雪の困に遇う。(前掲書一九五頁)

と竜神信仰の存在が示されている。

2 葱嶺・蛇歴国(インダス河のチラスとコットウガラ間の右岸、特にガイヤ間をダレル地方という)(前掲書一九頁)
法頭伝

葱嶺山冬夏有雪。又有毒龍。若失其意則吐毒風。雨雪飛沙礫石。遇此難者萬無一全。(大51—八五七下)

3 商弥国 (玄奘の帰りの道・Chitral と Mastuj)の間—白鳥氏西域史研究一三四頁)
大唐西域記卷第十二

波謎羅川中有大竜池。東西三百余里南北五十余里。據大葱嶺内。当瞻部洲中。其地最高也。……(大51—九四一中)
と、これら三ヶ所はヒマラヤ・カラコルムの山中で、ここに竜の信仰があったことがわかる。

一 仏乘のもとに(高橋)

一 仏乗のもとに（高橋）

次は烏長図（現在のスワット Swat 地方）である。

スワットの中心は昔掲薩城、今の Swat の主都 Saibu 北方四キロのミンゴラであった。この昔掲薩城の東北二百五十里大山中に阿波邏羅竜泉があった。竜がこの泉からの流れて洪水を起したので如来が調伏したが、竜の食糧の確保のため十二年に一度白水の災（洪水）が起ると記している。

4 阿波邏羅竜泉

大唐西域記卷第三

昔掲薩城東北行二百六十里入大山。至阿波邏羅竜泉。……泉流白水損傷地利。釈迦如来大悲御世。啓此国人独遭斯難降神至此欲化暴竜。執金剛神杵擊山崖。竜王震懼乃出尋依。聞弘說法心淨信悟。……願十二歲一収糧儲。如来含覆愍而許焉。故今十二年一遭白水之災。（大51—88—中下）

5 仏足石

この竜泉の西南三十余里のテイラート (Tirat) 村には仏足石があった。（現在仏足石はスワット博物館に）

大唐西域記卷第三

阿波邏羅竜泉の西南三十余里。水北岸大盤石上有如来足所履迹。随入福力量有短長。是如来伏此竜已。留迹而去。（大51—88—下）

とあって仏足石も竜と関係があった。

6 法衣を干した岩

然もここから三十余里、如来が法衣を干した岩がある。岩の上に細い線、（筆者も見学したが人工ではなく自然の岩の縞があつて、釈尊の法衣の縞がついたといわれて来た。）この法衣を干した原因が竜に関係している。即ち宋雲

行記に次の文章がある。

宋雲行記

はじめ如来が烏場国で布教した時、竜王は大いに怒り、大風雨を起した。その為如来の法衣は裏まで（雨水が）しみ通ってしまった。雨が終ると……袈裟を日に晒された。年月は久しくたっているが、（その袈裟の跡は）はっきりしていて真新しいもののように見える。（長沢氏前掲書一八八頁）又、川の西に池があり、そこには竜王が住んでいる。……竜王が神変をなすごとに、国王は（竜王に）祈禱し、金や玉や珍宝を池の中に投じた（長沢氏前掲書一八九頁）
これと同じことは法頭伝にも出ている。

法頭伝

及曬衣石度悪竜処悉変現在。石高大四尺、闊二丈許（大51—185八上）とある。

7 ウジャーナの王統伝説

このようにスワット地方に竜神信仰が随所にあつたことを示す最たるものは、スワットの王統が釈氏の男と竜王の娘とが結婚し、この国の王を滅して王位についた話が長々と大唐西域記でも語られている程である。（大51—18八三—中八八四上）

更にこの間に産れた子供が「舍利八分」の分配にあずかった上軍王で、シャンカルダル大塔という現存のスワット第一の塔を王は建てている。この王が阿波邏羅竜王を降伏させたという話まで書かれている。（大51—18八四上）かくてスワット地方に竜神信仰が広くひろまっていた上に、仏教がこれを教化して行ったさまが随所の伝説でうかがわれる。

更にスワット地方からマラカンドの山脈を越えて南に下ると、ここはかつてガンダーラ仏教の栄えた所である。こ

一仏乗のもとに（高橋）

一 仏乗のもとに（高橋）

この最大の仏塔はカニシカ大塔・雀離浮図であるが、大唐西域記や慈恩寺法師伝には、この大塔をカニシカ王が作る因縁について詳しく述べているが竜との関係は述べていない。然し宋雲行記には竜が仏塔を守るものとして述べられている。即ち

8 乾陀羅・雀離浮図

宋雲行記

まことに（この雀離浮図は）西域における塔の中、第一等のものである。この塔が初めてできた時、真珠でもって網を作り、その上を覆った。その後数年たつて、王はこの真珠の網は値万金なので、自分が死んだ後、恐らくは他人が略奪するのではないかと考えた。また大塔が破壊しても修補する人がないのではないかと心配した。そこでこの真珠をはずし銅壺にこれを入れ、塔の西北一百歩の地を堀って埋めた。そして樹を植えた。……樹下には四面に座像があり高さ五丈であった。つねに四頭の竜がこの珠を守っており、もしひとがこれを取ろうと欲心を起すとただちに禍変がある。（長沢前掲書二〇八—二〇九）

9 インダスの渡し

ガンダーラからインダス川を渡ってタキシラに向う所に *Opind* の渡しがあった。現在のアトックの鉄橋から東北十六マイルの所である。インダスの流れを渡るには水の精即ち竜に安全をさぞ祈ったことだろう。

大唐西域記

渡_レ信度河_二河_一広三四里南流。澄清皎鏡泊漉漂流。毒龍惡獸窟_六其中_一。若持_レ貴宝奇花果種及仏舍利_レ渡者。船多飄没（大51—八八四中）

慈恩寺法師伝

自烏鐸迦漢茶城_二南渡_レ信徒河_一。河_一広三四里流極消息。毒竜惡獸多窟_二其中_一有持_レ印度奇宝名花及舍利_レ渡者_レ船輒覆没。（大

と竜が珍宝、佛舍利を持ち出すことを防いでいると書かれている。

このインダス河を渡ると西北インドの文化の中心地タキシラがある。ここにも竜の話がある。即ち

10 咀叉始羅國

醫羅鉢咀羅竜王池

大城西北七十余里有「醫羅鉢咀羅竜王池」……今彼土晴雨祈晴。必興沙門共至池所彈指慰問隨願必果（大51—1884下）

と迦葉仏の時醫羅鉢羅樹を切った為竜にさせられた比丘がその贖罪の為、沙門の言うことを必ずきくようにしていた。そこで人々は願いごとがあると出家と共に来て祈れば必ず願いをきいてくれるとある。この竜王の話はスワットの奥地の阿波邏羅竜王の話と同じような話だが、こうした話は各地にあって求経僧達が行く先々で耳にしたことであろう。こうして南に進んでタキシラまで竜の話を探して来たが、ここでアフガニスタンまでもどらなければならぬ。法頭とか末雲はヒマラヤ・カラコルムを越えて南進してガンダーラに入ったが、玄奘の時代にはこの通路は廢たれていた。為に北に遠まわりして、現在のソ連領サマルカンド・タシケントを通過してバルフに入り、クシヤンの夏の都カピシに入っている。そこで二つの竜に関する記事を残している。

11 迦畢試國（大唐西域記卷第一）

- 。王城西北三百余里至大雪山。山頂有池。請雨祈晴隨求果願。……竜乘頭毒作暴……迦賦色迦王即於兩肩起大煙焰。……龍王懼威帝命（大51—1874下）
- 。象堅翠堵波北山巖下有二竜泉（51—1875中）

一 仏乘のもとに（高橋）

然して「竜と仏教」の關係を一層深くあらわしているのが現在のジュララバードである。

12 那揭羅曷国

大唐西域記には

。崖石壁有大洞穴。瞿波羅龍之所居也。昔有仏影煥若眞容。相好具足儼然如在。近代已來人不遍觀。縱有所見髮髻而已。至誠祈請有冥感者。乃暫明視尚不能久。……居此窟為大龍王便欲出穴成本惡願。……如來愍此國人為龍所害運神通力自中印度至。龍見如來毒心遂正。受不殺戒願護正法。因請如來常居此窟。……如來告曰。吾將寂滅為汝留影。……(大51—187九上—187九上)

即ち大竜王を教化する為、釈尊は中印度から神通力でこの地に來られた。竜は釈尊の尊容に接すると毒心が収って正法に帰依した。然しいつ悪心が起るかわからないから、常にこの窟に居住して下さいと懇願したが、釈尊はすぐ入滅するからと、仏影を残したとある。即ち竜の窟が仏教の精舎になったことをこの話は如実に示している。

同じ話は大慈恩寺法師伝にもある。

大慈恩寺法師伝第二

又聞燈光城西南二十余里有瞿波羅龍王行住窟。如來昔日降伏此龍。因留影在中……(大50—132九下)

然し法顯伝には

那竭城南半田延有石室博山。西南向佛影。此中去十余步觀之如佛眞形。金色相光明炳著。近觀微髣髴如有……(大51—18五九上)

とあって竜には言及していないが

道栄伝

。彌波羅竜窟に至れば仏影をみる。山窟に入り去ること十五歩、西南して戸に向かい、遙かに望めば仏のあらゆる相好がはっきり見える。然し近くで見ると、暗々として何も見えない。(長沢氏前掲書・東洋文庫二〇一—二二頁)

とあって竜窟變じて仏影窟となったことがわかる。こうして竜神信仰が仏教に包攝包容されて行くことが先人の旅行記の中から十分推測される。その最たるものがカシミールのスリナガルである。

13 迦濕彌羅國

大唐西域記

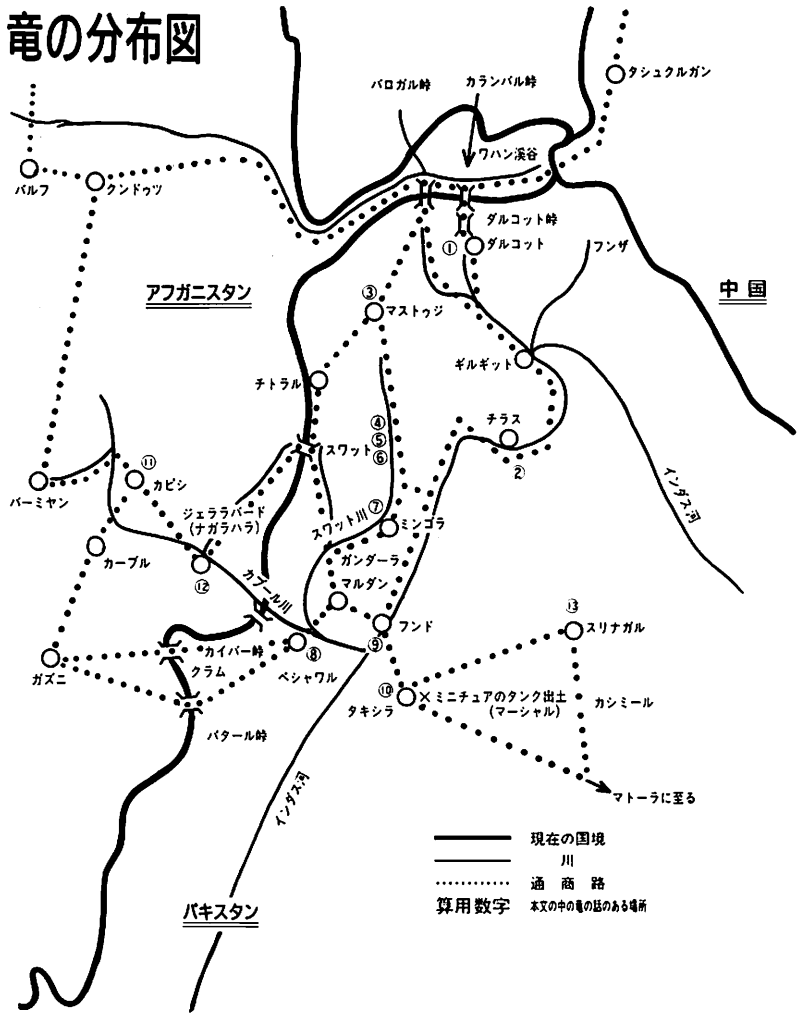
阿難弟子末田底迦羅漢者。得六神通……便來至此於大山嶺。宴坐林中。現大神變。龍見深信。請資所欲。阿羅漢曰。願於池內。惠以容膝。龍王於是縮水奉施。羅漢神通廣身。龍王縱力縮水。池空水盡。龍翻請地。阿羅漢於此西北。為留二池。……運大神通力。立五百伽藍。……(大51—八八六上中)

とある。龍王がマディアンティカに帰依して、「何んでもほしいものを言つて下さい」と言うので、マディアンティカは「膝の入る池の土地をほしい」といった。龍王は水をひかせた上、阿羅漢が神通力で巨大な姿になったので、池は水がなくなつて、竜が逆に住む池を懇願する立場になつてしまつた。その干上つた土地に五百の伽藍を建てた。これは仏教が竜を教化して行つたという前掲の諸律の文を裏付けていることになる。

これら竜の出て来る所を地図にのせてみると次の如くなる。地図中のナンバーは本文の話のあつた所である。こうして地図にしてみると、竜神信仰はインダス水系・カプール水系、そしてスワット川に注ぐ諸流の川沿いに遺跡があることがわかる。

特に多いのはヒマラヤ・カラコラムから流れ出る川沿いである。これは「十二年に一度の白水の難」¹³⁾の話でもわかるように、とかくヒマラヤやカラコラムの山々では時としてモンスーンのもたらす考えられないような豪雨が降り、

竜の分布図



— 仏乗のもとに (高橋)

普段は何んでもない小川を大河と変え、山肌へばりついた部落を瞬間にして洗い流してしまふこともしばしばある。又四・五千メートル以上の雪線の上下は、時として下流の農耕に支障をもたらすこともしばしば起っている。為に水の精、川の主としての竜への信

仰を生んで行った。このことが川沿いにこうした竜の話 distributes せしめて行ったのであろう。

こうした話を通じて感ずることは、ジェララバードの仏影窟がもともとは竜の住いであつたり、スリナガルの五百伽藍の土地は竜池が奉納された所であつたし、法衣を示した大岩の所の話等々は「竜を教化して仏教をひろめた」と

する諸律の文を実証しているといえよう。

然も、竜を教化するだけではなく、竜を佛教の守護神、法の護法神とにまでしている所が興味をもつ。ペシヤワルの雀離浮図の、

「ストゥーパをおった真珠の網を埋めて四頭の竜に守護せしめた」話である。これは前掲四分律四十六破僧捷度品で、竜王が宝珠を与



E 菩薩像 ペシヤワル博物館蔵



F マカラ パールブット

えた後、「二頭の竜をして守護せしめ終り帰した」
(大22—九二—中)とあるように、守護神としての
性格までも持ちはじめている。

竜が守護神として仏教の中に所を得て来ていると
いうこと、ここが注目すべき所と思う。



この二頭の竜が守護した話と偶然か必然かわから
ないが、二頭の竜が経筒や宝珠の珠をくわえている
彫刻が数多く見うけらる。筆者が長年、パキスタン
の全博物館、そして全世界に散らばったガンダーラ
の石彫の菩薩像を調べて行くうち気付いた。菩薩像
の胸のネックレス状⑬に垂らした経筒や宝珠の両側に
は竜やエンジェルがいるが、約五十五パーセント、
半数以上が二頭の竜が両側からくわえている。即ち、この経巻や宝珠を守護しているとも考えられよう。

インドの統統からいって頭が象や鰐、尻っぽが魚か蛇のマカラ(写真F)や何頭ものコブラの頭を束ねて後背した
ものを総称してナーガ(漢訳して竜)としたものが仏教彫刻の随所にあるが、ガンダーラの菩薩像の胸の竜はこうし

た範疇を越えている。長い髭を頭の横や後ろになびかせ、大きな目をむき、口を開いたさまは、まさに、現代我々の常識で考える竜そのものの姿であって、インドのマカラやナーガではない。中にはたくましい足をたてた、キリンビールの商標のようなものまである。この竜を胸だけでなく、頭のヘヤーバンドや頭の横の髪飾としてつけている菩薩像⁽¹⁷⁾まである。否、菩薩

像だけでなく写真Gの如くパンチカ（毘沙門天の大将軍、後に毘沙門天と区別がつかなくなる。）の胸にまで竜をもって来る。勿も毘沙門天王は夜叉と竜の二隊を看族としている長だから不思議ではないが。

ガンダーラの石彫、特に菩薩像は二世紀頃からはじまった。イン



G タカール出土 パンチカ（ラホール博物館）

ドでは汚れた人間の姿で仏を表現しないという伝統あったが、これにとらわれない外来人（クシヤン）がギリシヤ彫刻になれた外来人の彫刻家をして最初に仏像を作らせた。然し、さすがに仏像は躊躇して菩薩像から作りはじめた。その初期の造像たる菩薩像に、「竜」が経巻や宝珠をくわえているから、前掲の諸律や海竜王経・正法華経の女人成仏の話等々と、ほぼ時代的に対応しているように思われる。なぜなら、ガンダーラの石彫は二世紀にはじまり、三世紀から四世紀の前半が最盛期となり、五世紀頃にはストッコ（石膏製）にその座を譲っているからである。然も一番ギリシヤ・ローマの影響の強いと思われる菩薩像に竜が彫られているということは、仏教が、特に大乘仏教が竜神信仰の徒を教化し、そこに進出して行ったことを物語っている。菩薩像だけでなく、パンチカの胸にも竜が彫られていることは竜神信仰が他の神々と結びついて仏教の中に所を得て行くさまが理解されよう。



かくの如く、今迄考察して来たように、マーシャルの発掘したミニチュアのタンク（水槽）、そして求経僧達の書いている竜神信仰の記事、その分布図。且つ又菩薩像の胸の竜、更にパンチカにまで竜が彫られている等々を見て来ると、今回新たに入手した「竜に腰掛けたパンチカとハリテイ」が、共々に仏教の中にとり入れられて行ったこの仏教の包容性をしめし感ずる。前掲善見律毘婆娑等の「竜王を帰依させ、多数のヒマラヤの乾闥婆・夜叉・鳩槃荼鬼、パンチカ・ハリテイを預流果に達せしめた」という文が十分裏付けられていると思う。

仏教は、それぞれの地方の種族神、土俗神を自己の中にとり入れながら仏教をひろめて行った。その仏教の包容性、寛容性が目につく。その最たるものが法華経であったと思う。難陀竜王等の八大竜王も、緊那羅も乾闥婆も阿脩羅・迦樓羅・夜叉鬼子母羅刹までも、みんな包容して夫々に所を得さしめ、正法の守護神として抱擁して行った。

これこそまさに「一仏乗の中に」に つつみ込んで一如とする、一大マンダラの精神にはかならない。

註

- 1 Roseasfield. *Dynastic Arts of Kusnan*
 - II *Kanishka Legends and Imperium*
 - III *Huvishka and the Kushan Pantheon* 参照
 - 2 法華経写本及び薬土品以下
 - 3 カラチ博物館蔵 アルドクショー並びに写真C参照
 - 4 仏所行讃(大乘仏典)中村元訳 釈尊最後の旅参照
 - 5 テハラン博物館展示目録に多く示され又、ガンダーラ出土品ではカラチ博物館蔵のアルドクショー
 - 6 筆者は中外日報昭和六十三年十一月24日・25日・29日に書いている。
 - 7 Mahavamsa 12—34, 29—37 (Pali Text Society Mahavamsa)
 - 8 千鴻竜祥氏 本生経類の思想史研究(三五頁)「現在の四阿舎及び諸広律(説一切有部律を除く)の翻訳は何れも四世紀後年……」
猶この点に関しては塚本啓祥氏は法華経の成立と背景(佼成出版社)七二頁・七三頁で詳述している。
 - 9 マーシヤル タキシラII四六三頁—四六七頁に解説・III plate 136で図示
 - 10 Kusāna Architecture with Special Reference to Kauśāmbi R.S.Sharma (Kusāna studies) Ancient History, Culture and Archaeology University of Allahabad India参照
 - 11 碑銘に国王、長者、商人の名多し、例えば聯合目録一七六一・一七八六参照
 - 12 筆者の所蔵品中に七頭のコブラを後背にした人物が池の中から合掌している彫刻がある。池のまわりには欄楯・柵が作られている。又樹神や仏塔のまわりに欄楯のあるのは、ブタガヤの彫刻がある。(山本智教インド美術史大観写真真篇9—58・9—1)
 - 13 R.S.Sharma. *Perspective in Social and Economic history of India*
 - 14 經典中の文字が歴史的資料として認められるようにして樓神六十号「数々抽出」で考究した。
- 大51—八八二中下

一 仏像のもとに (高橋)

16 菩薩像は在家の居士をシンボライズするからいろいろの飾り物をつけている。ガンダーラの菩薩像のネックレスはシリヤのバルミユラの影響といわれている。古代オリエント博物館刊 Sculpture of Palmyra 1 写真三六三・二五一・三五九・

三六二…

17 スシヤフル博物館展示中の菩薩像頭部(華蓋写真枚数あり)

18 山本智教氏前掲書 バールフット9—42・9—53・12—95

19 マトゥーラの彫刻に明らかに仏像だが「菩薩の像を奉納」とことわり書きをしているほどである。前掲聯合目録 六四三・六五三

その他 参考図録

栗田功編 ガンダーラ美術ⅠⅡ

山本智教 インド美術史大観

古代オリエント神、ユータマインツダの生涯

MICHAEL MITCHNER ANCIENT and CLASSICAL WORLD 83 J. MARSHALL TAXILA Ⅲ

NHK Gandhara Art of Pakistan

The Ancient Oriental museum memories Nol. Sculpturfs of Palmyra